種としての人間のゆくさき
――フロイト、ラマルク、レム――

中　村　靖　子

はじめに

〈死の欲動〉を初めて概念化した『快原理の彼岸』*Jenseits des Lustprinzips*（1920）は、フロイトのメタ心理学[1]の頂点を画すものとなった。そこに至るまでの流れをごく簡略化して述べるならば、『ヒステリー研究』*Studien über Hysterie*（1895）は精神分析の始まりを告げ、『夢の解釈』*Traumdeutung*（1900）は自由連想法を、『トーテムとタブー』*Totem und Tabu*（1913）は「思考の万能」という鍵語を提示し、「欲動と欲動運命」Triebe und Triebschicksale（1915）は人間の根本欲動をエロスとタナトスという二つの形で定式化した。ヒステリー研究以前にはフロイトは、19世紀の近代神経学、とりわけ脳解剖学に従事し、その成果として最初の単著『失語症の理解にむけて』*Zur Auffassung der Aphasie*（1891）（以下、『失語論』と略記）を著している。ブローカによる「言語の運動中枢」発見（1861）に続き、ヴェルニケによる「言語の感覚中枢」の「発見」（『失語症候複合』（1874））によって、精神機能を脳の部位に局在させようとする試みがいよいよ盛んとなっていた。当時の失語症研究は、生きた人間の脳を直接診察することができないため、死後解剖によって損傷部位を確認するという方法で、患者の生前の機能障害と事後的に関連づけてゆくものだった。こうした損傷研究に基いて言語機能メカニズムを図示するあらんかぎりのモデルが提案されたが、なかには、言語の運動中枢と感覚中枢のみならず、「概念」中枢まで想定するものまで登場した。フロイトは、みずから診察した所見を持たないままに、各説が根拠とした症例報告や解剖学的所見を検証しそれらの学説の修正を試みたのである。神経科学的検証に始まるこの書は、まるで当時の技術的限界を補うかのように、中盤以降、シャルコのヒステリー研究、J・S・ミルの言語研究へと軸足を移してゆく。ここで理論的支柱となった学説のうち、とりわけ神経学者ヒューリングス・ジャクソンの「解体（Dissolution）」説と、失語学者チャールトン・バスティアンの機能修正説（Bastianische Modifikationen）は、「退行（Rückbildung）」［Freud (1891): 75/45］[2]、「進化の逆行（Dis-involution）」［Freud (1891): 132/106］という考えへと発展し、その後、〈死の欲動〉

1　フロイトは1914年から15年にかけて『メタ心理学の準備のために』*Zur Vorbereitung einer Metapsychologie* と題する論集の出版を構想していた。

2　これについては『失語論』第四章編註 (1) フロイト全集第 1 巻編註481頁以下参照。

理論へと展開してゆく際に大きな役割を果たしたと思われる。

1980年代に入って非侵襲的方法が開発されるに及んで、生きたまま人間の脳を観察することが可能となり、脳機能研究は飛躍的に発展した。その中でフロイトの神経学的著作の再評価も進んだが、〈死の欲動〉理論は、それが生物学的・神経学的研究に淵源をもつにもかかわらず、この分野では取り扱いがたく、精神医学の領域でももはや古典となりつつある。精神分析が提示した「心的装置」のモデルは、コロンブスの卵のように、当たり前だけれどそれまで誰も言わなかったこと、そしていったん指摘された後では自明のこととして、今更取り上げる必要はない、ということだろうか。

ポーランドの作家スタニスワフ・レム(1921–2006)は、『ソラリス』*Solaris*(1961)の作者として知られるが、SF というジャンルの中でも特異な位置を占める。そのレムにとって SF がどういうものであったかを考えるために参考となるのが、SF という領域を切り拓いた作家としてレムが挙げるヴェルヌ、ウェルズ、ステープルドンの三人に関するレムの発言である。レムによれば彼らは「まったく新しいものを創った」のみならず、他の作家たちすべてと決定的に異なっていた。

> 彼らはみな、思弁のためのほとんど無制限の領域をもっていた。それは手つかずの処女地であり、まだ文学作品によって満たされていなかったからだ。この三人のうちどの作家も、それぞれ異なった方角からこの無人地帯(ノーマンズ・ランド)にやってきて、この「未知の国(テラ・インコグニタ)」で何らかの具体的な場所を占有し、自分の領地とした。[Lem (1984): 19/178]

読者として、ウェルズらが創始した SF に「種形成(Radiation (Speziation))」[3]を期待していたレムは、アメリカの作家たち――フィリップ・K・ディックは別として――によってその期待を裏切られた。曰く、「アメリカの作家たちの科学に対する無知や、唖然とするほど低い文学的水準は、とうてい理解しがたいものだった」[Lem (1984): 19/178]。そして作家としてレムは、数学や情報理論、サイバネティクスや心理学にまたがる該博な知識に支えられて、「新しい可能性を切り拓く領域に移行」してゆく。その途上で書かれたのが『ソラリス』であり、さらにその次の「新しい領域」を拓く試みが、虚構の書評や虚構の序文というスタイルの作品群である[Lem (1984): 20/179]。

「思弁のためのほとんど無制限の領域」でレムは、かつて提起されたことのあるさまざまな学説を縦横無尽に駆使する。その中で、精神分析理論や進化説もまた再解釈され、変奏され、新しい形で提起される。フロイトは、「我々が意図しているのは、ラマルクを完全に我々の基盤の上におくこと」であり、それが精神分析学の完成になると考えていた。何となれば、ラマル

3 進化学の術語。レムの説明によれば、「動物の新しい種がさらに新しい様々な種を次々に生み出し、扇状に広がっていくこと」[Lem (1984): 19/178]。

クの「用／不用」説は、「必要［欲求］」が身体的変化をひきおこす力となるという主張であり、フロイトの言う「思考の万能」を裏付けるものだからである。一方、レムの虚構の書評の一つ、『21世紀の軍事システム、もしくは逆向きの進化』*Waffensysteme des 21. Jahrhunderts oder The Upside Down Evolution*（1983）は、サブタイトルが示すとおり、「逆向きの進化」を、「退行」を主題とする。また、レムの短編「リンファーテルの公式」Die Lymphatersche Formel（1969）は進化のメカニズムの検証と進化の過程において人類が果たした役割を主題とする。本論は、これらのレムの作品を、「解体」説と機能修正説を思想的基盤とするフロイトの〈死の欲動〉理論の発展的受容として捉え、ラマルクとレムを駆動力としたその射程の拡がりを浮かび上がらせようとするものである。

「進化の逆行」という発想

ハーバート・スペンサーはダーウィンの進化論をあらゆる種類の現象に適用したが、ジャクソン（1835–1911）はスペンサーに倣って、これを神経系に適用した[4]。『神経系の進化と解体に関する講義』（いわゆる『クローニアン講義』（1884））はそれを論じたものである。神経系は層構造をなしており、進化とは、最低次の中枢から最高次の中枢へと向かうプロセスである。そして神経系の疾患とは、逆向きの進化、すなわち「進化の過程の逆行（the reverse of the process of Evolution）」である［Jackson (1884): 10/5］。この階層構造ゆえに、解体は、必ずしも全面的に起こるとは限らない。「もしも解体が全面的なものであれば、その結果は死である。この講義で全面的な解体について私が言うべきことは何もない」［Jackson (1884): 8/4］。「解体」は、常に「局所的」、「段階的」に起こる。そして「神経系の一部分の疾患が、進化全体の逆行であることはありえない」［Jackson (1884): 14/8］。

解体が、このように局所的に特定の部位を襲い段階的に進行するがゆえに、個々の中枢は、身体というシステム内部で刻々と変化する状況に随時対応する必要に迫られる。機能不全に陥った部位に代わって、別の部位がその機能を引き受けるということが起こる。あるいは「連合」を通して、それまでにはなかった連絡回路を開くことが起こる。バスティアンによれば、中枢を賦活する刺激にもまた、直接的な外生（感覚）刺激から随意的な内生刺激まで、さまざまな段階のものがあり、もっとも随意的な刺激に反応するのが最も高次な中枢であり、これがもっとも壊れやすい。したがって、ある中枢に障害が起こったとき、その結果として、随意的な刺激には反応しないが、連合を通して別の中枢と結びついて外生刺激には反応する、直接的な外生刺激にのみ反応する、直接的な外生刺激に対してさえ反応しない、というように、大きく三つのタイプに分けられる。これらを敷衍してフロイトは、彼の『失語論』を、以下のよう

4　ジャクソンは「解体」という術語をスペンサーから借りたとしているが、実際にはスペンサーには見つからず、おそらくジャクソン自身の発想であろうと『失語論』の新書版（1992）の編者は述べている。

にジャクソンの言葉でもって締め括っている。

> 「神経配列が破壊されるとき、それは、人が異なれば、異なった部位が異なった規模で破壊されるのであり、破壊が生ずる速度もまた異なっている」。[Freud (1891): 145/122]

ヒトの神経系が、もっとも単純な有機体が何万年という年月をかけて進化した一つの到達点であるとすれば、そこへと至るまでにありとあらゆる刺激に堪え、その都度かくも多様な機能修正を遂げてきたことは驚嘆に値する。しかしその奇跡の賜物がまたいかに壊れやすいかを、症例研究は教えてくれる。損傷という新たな要因に応じて「解体/退行」へと向かうそのプロセスにおいてさえ、壊れ方も壊れる度合いも速度も、個体ごとに異なるという多様さが示される。「正常」な神経系のメカニズムのこの壊れやすさ、維持しがたさは、本来それがいかにありえないものであったかを証している。

> したがって、有機体のあらゆる欲動が守旧的であり、歴史的に獲得されたものであって、退行(Regression)を、つまり、かつて以前の状態の再興(Wiederherstellung von Früherem)を目指すのだとすれば、有機体が進化してきた結果とは、妨害し逸脱させる外的影響のおかげだとしなければならない。[Freud (1920): 39/91]

原初の生命体が最初から変化することを望んだとは考えられない。環境の条件さえ変わらなかったら、同じ生活を際限なく反復しただろう。しかし、地球は周期的に激変を繰り返した。それと共に有機体は、みずからを変化させることを強いられた。それによって新たな環境に応じ、生き残るものと絶えるものに分かれ、また個体内部でも強化される器官と機能がある一方で、廃れてゆく器官と機能とがあった。ありとあらゆる刺激に堪えつつ変化を遂げてゆく生命の目指す目標が、「いまだかつて達成されたことのない状態」であるとは考えられない。むしろ、「生命あるものがかつていったん放棄したものの、あらゆる進化発展の迂路を経ながら帰り着こうとする昔の状態、生命の出発点である状態」であると考える方が自然であろう。

> 生命あるものはすべて内的根拠に従って死に、無機的なものへと帰ってゆくということを、例外なき経験として仮定することが許されるなら、われわれは次のようにしか言いようがない。すなわち、あらゆる生命の目標は死であり、翻って言うなら、無生命が生命あるものより先に存在していたのだ、と。[Freud (1920): 40/92]

「かつて以前の状態」、生命のない状態へと戻ろうとするその仕方も進み具合も、個体ごとに異なる。結局のところ、有機体はただ自分のやり方でのみ死のうとする」[Freud (1920):

41/93]。これが、ジャクソンの解体説とバスティアンの機能修正説から「進化の逆行」の仕組みを抽出し、それを展開させた先にフロイトが辿りついた定式である。

ラマルクの『動物哲学』

リンネが種や綱ごとに分類する方法を導入して以来、植物研究は急速に発展していった。種や綱の数をそもそもどれだけ設定するか、何を分類のための共通基準とし、種の共通項、綱の共通項を何とするかなどについてさまざまに議論が交わされ、分類法も改訂されていった。それに比べて動物研究ははるかに遅れていた。しかし1793年、パリにあった王立植物園が廃止され、代わりに設立された国立自然史博物館にラマルク（1744–1829）が就任したことによって、以後、動物研究は急速に発展してゆく。当時の動物研究はほ乳類を中心とし、鳥類、両生類、魚類がそれに続くのみで、ラマルクが担当する昆虫や蠕虫についてはまだ誰も研究をしていなかった。そのおかげで、この担当のポストだけが空いていたのだが、ラマルク自身もそれまで植物研究に従事しており、動物研究、とりわけ昆虫と蠕虫についてはまったくのゼロからの出発だったという。就任当時、ラマルクは50歳に近かった[5]。

従来博物学は、自然界を植物界、鉱物界、動物界の三つに分けてきたが、ラマルクの『動物哲学』（1809）はこれを「生きている有機体」と「生命のない無機体」とに分ける［Lamarck (1809): I, 91/62］。無機物と生物の間にある果てしない「間隙」に比べれば、動物と植物との相違ははるかに小さい。そして、「生物のそれぞれの界において、一つの真の系列を類縁の考察に基づいて実際に形成することができる」ことを認めるならば、そこから多くの洞察が得られる。

> とりあえず、私が示そうとするのは、自然は、長い時間を助けとして、すべての動物とすべての植物を生みだしつつ、生物の体制［組織］（l'organisation）のしだいに複雑さを増す構成に関して、真の階梯（*échelle*）をそれぞれの界に実際に形成したということであり、しかも、はっきり知っておかねばならないが、この階梯は、自然的類縁によって対象を接近させはしても、全般的系列の主要な群においてしか把握可能な段階（*degrés*）を示さず、種においても、属においてすらも、これを提示しないということである。［Lamarck (1809): I, 107/70］

「類縁性」を基準として動物界全体を見渡し、「階梯」という関係性を認めることによって、異なる種と種の比較が可能となる。そこから、動物が有する諸能力について、段階的発展という

5　木村陽三郎「ラマルク、人と業績」、『科学の名著 ラマルク』朝日出版社　1988年所収、v–xxvi頁、ここではxx頁。

観点からの分析が可能となる。類縁によって隣り合っている二つの異なった種の動物について、一方にはあるが他方にはない器官と能力に関して考察することに意味が生じる。これが、ラマルクの方法である。このように、生命あるもの全体に一つの関係性、「一種の階梯あるいは段階的連鎖（une sorte d'échelle ou de chaine graduée）」を認めるならば［Lamarck (1809): I, 7/20］、ある種は、それより複雑な種の「前段階」であると見なしうる。前段階にあたる種の動物がそなえている器官を変化させるか、もしくは新しい器官を創造した動物は、それだけ多くの能力を有することとなったと言えるのである。

そもそも自然は、最初期の段階にある生命にとつぜん高度で複雑な能力を与える手段をもたなかった。もっとも単純な動物は、生命のもっとも初期の段階であり、神経構造をもたず、感覚器官をもたず、したがって感覚も感性も持たない。そこから自然は、徐々に複雑なものを作り出していった［Lamarck (1809): I, 7/19］。つまり、感覚や感性は、生命のすべてに与えられているわけではなく、体制［組織］の複雑化を経てはじめて可能となったのである。この階梯のなかに、脊椎動物と無脊椎動物との区分を設けたのはラマルクの功績である。無脊椎動物は、脊椎動物に比べてはるかに種の数が多く、変化に富む［Lamarck (1809): I, 10/21］。つまり動物は、脊椎を獲得することと引き替えに、これほどの多様性を失ったのだ。その代償として、骨格と筋肉の発達を得た。それがやがて感覚や感性をうみだす基盤となったのである。

感性の起源が生命の複雑化のプロセスの途上で生じたとはすなわち、逆に言えば、「身体的なものと心的なものは、その源泉にあっては、たしかに、同じ一つのものにすぎない」［Lamarck (1809): I, 5/18］ということである。

> 身体的なもの（le physique）が心的なもの（le moral）におよぼす影響はすでに認められてきたとはいえ、心的なものが身体的なものそれ自体におよぼす影響には、なお十分な注意が払われていないように私には思われる。ところが、これら二系統の事態は共通の源泉をもち、相互に作用をおよぼしている。両者がもっとも分離されている場合に、特にそうである。だから、私たちはいまや、両者がおたがいの変化につれて変わることを証明する手段を手にしている。［Lamarck (1809): I, 4/18］

身体的な状態が心的状態に影響を与えるのと同様に、心的なものが身体に影響を与えることもまた、疑いようがない。身体も心的なものもそれぞれに、環境に応じて変化してゆく[6]。植物もまた、環境に応じて変化しうるが、動物と植物を分かつのは、刺激を感受するか否か、すなわ

6 身体的なものと心的なものを、同じ一つの起原から発達したものと見なすこと、そして両者を因果関係におくのではなく、併行現象として捉えるという考えを、フロイトはジャクソンを経由して失語研究に取り入れた。「この［生理的現象の］連鎖の一つ一つの構成部分に（或いは複数の構成部分に）いずれかの瞬間からそれぞれ一つの心的現象が呼応するようになるというだけのことである」と［Freud (1891): 98/69］。

ち「被刺激性 l'irritabilité」を有するか否かという相違である[7]。その動物になぜ複雑化の傾向が生じたのかを問うならば、環境が動物に影響を与えたというのでは十分ではない。「環境における大きな変化は、動物にとって、その必要［欲求］（les besoins/Bedürfnisse）に大きな変化をもたらし、そしてこのような欲求の変化は必然的に動物の活動に変化をもたらす」というのが正しい［Lamarck (1809): I, 221f./125］。変化によってもたらされた新しい環境が持続的なものとなれば、それによって動物に新しい「習性」が与えられる。そのとき、「しかじかの部位を他の部位よりもとくに使用し、ある場合には、不用となった部位をまったく使用しなくなることも起こったであろう」［Lamarck (1809): I, 222/126］。このように、体制［組織］のすべての変化は、その個体の必要［欲求］が変化し、変化後の状態が安定したことに起因する。これが、ラマルクの「用／不用」説である。生命がもついかなる能力も、それを成しうる器官がなければ為しえないという認識は、今でこそ当たり前のようでいて、当時はまだ確認され主張される必要があった。ラマルクの「用／不用」説もこの主張と不可分のものである。

このように第一部で「動物の自然誌についての考察」が述べられたあと、これらの考察を受けて、第二部では「生命の物理的原因、生命が存在するために要求される条件、生命の運動の刺激力、生命を所有する物体に与えられる能力、生命がこれらの物体に存在することの成果についての考察」が展開する。

すべての動物は、体躯を動かすか、諸部位の一部を動かすことができる。それらのいかなる運動も、外部から刺激を受けとるか、もしくは内部からの刺激によって引き起こされるが、いずれの場合にも刺激を感知する能力、すなわち「被刺激性」を必要とする。曰く、「生命運動の特性は、伝達によってではなく、刺激によって、みずからを形成し、保持することである」［Lamarck (1809): I, 366/217］。もっとも単純な（不完全な）生き物は、外部からの刺激をうけて動くが、その際に何の感性も経験しない。次の段階では、外界からの刺激を受容し、それに対して反応する能力を持つ。さらに次の段階になると、自らの内部によって生じた刺激に反応して動く――この分類は、ちょうどパスティアンが、中枢の破壊の程度に応じて機能不全のタイプを分類したのに逆対応している。そこでは、「外生刺激」「内生刺激」として説明されていた――。

器官を創造し変化させるという着想を可能にしたのは、動物の身体組織は「細胞組織」と「何らかの流動体」の二つから構成されるという身体観である［Lamarck (1809): I, 373/220］。但し、生命の体内にあって目に見える流動体と、微細で、決して目に見えないが生物を活気づける流動体とは厳密に区別されなくてはならない［Lamarck (1809): I, 372/220］。つまり、体

7　動物は、いつでも刺激を感受する部位をもち、被刺激性の刺激の結果として運動するが、植物は「刺激を感受することは決してなく、消化を行わず、意志によっても、真の被刺激性によっても、運動しない」［Lamarck (1809): I, 96/64］。オジギソウのように、触れられると収縮するが、しかししばらく時間をおかないと、再び触れられても収縮しないものは、ラマルクの定義にある「いつでも刺激を感受する」という動物の定義から外れることになる［Lamarck (1809): I, 95/63］。

内には血液などとは別の、目には見えない流動体があり、これを含む神経細胞が柔軟な組織構成を持つおかげで、体制［組織］は可変性をもちうるのである。この流動体の特性は「通路、沈殿の場所、そして出口を開くこと」にあり、それによって「さまざまな導管を、ついで多様な器官を創造すること」にあり、結果、その多様性に応じて「これらの導管と器官を変化させること」にある［Lamarck (1809): I, 374/221］。第三部の「同一の活動をおこなう性向の起原、そして動物の本能の起原について」という節では以下のように述べられる。

> どんな活動においても、これを刺激する神経の流動体は移動運動をこうむり、この運動が活動をひきおこす。ところでこの活動が数回くりかえされると、活動をおこなった流動体が一つの通路を切り拓くことは疑いない。この通路は、流動体がひんぱんに通り抜けただけに、なおさら通りやすくなっており、そして、流動体があまり開かれていない通路よりも開かれた通路をたどるほうにいっそう大きい能力をそなえていることも疑いない。［Lamarck (1809): II, 318/394］

「神経流動体（le fluide des nerfs/Nervenfluidum, das Fluidum der Nerven)」という考えは後に否定されたが、通路を開くこと、ひんぱんに通られた通路はたどりやすくなるというイメージは、19世紀後半の神経学においても継承されている。「神経インパルスは、さほど多くの抵抗に遭わずにそれらの細胞を通過する。そしてインパルスの通過に抵抗が与えられるのが少なければ少ないほど、その結果起こる活動は意識を伴うことがますます少なくなる」［Ross (1887): 102］[8]。後にブロイアーはこれを「最小抵抗の原則」として、ヒステリー現象の解明に用いた。

> さて、情動興奮の放出は何によって規定されているのだろうか。そして、あれやこれやの反射ではなく、ほかならぬまさにその一つの反射が作り出されるのはなぜだろうか。［……］放出が起きるのは抵抗がすでに低下してしまった回路［……］においてである。［Breuer u. Freud (1895): 226/下44］[9]

ラマルクのいう「流動体」を「情動」に置きかえるならば、「通路を開くこと、沈殿の場所を作ること、そして出口を開くこと」はそのままヒステリーのメカニズムに当てはめることができる。「放出に成功しなかったもの［情動］は、幾重にも組み替えられ代理されて、痕跡（徴候）となって生き残り、その滞留は、「加工」を待つ潜伏期となる」［中村（2011): 294］。

8 ［中村（2011): 177f.］。
9 ［中村（2011): 295］。

> 我々が意図しているのは、ラマルクを完全に我々の基盤の上におくことであり、器官を創造し変形するところの、ラマルクのいわゆる「必要」は、ヒステリーにその痕跡の見られる如き肉体に対する無意識的思考の力に外ならないことを示すことです。要するに「思考の万能」を示すわけです。そうなれば目的と有用性は精神分析的に説明されるでしょう。それは精神分析学の完成となるでしょう。［Briefe: 247］

1917年、フロイトは、フェレンツィと共同で行っていた「ラマルキズムの精神分析に対する関係の研究」を上記のように要約してアブラハムに書き送った。フロイトにとって、ラマルクが提示した「必要［欲求］」は、肉体に対する無意識的思考の作用の結果に外ならない。それが「思考の万能」である。それは『トーテムとタブー』以来、フロイトの鍵語となっていた。器官を創造し変形するよう要請しそれを実現する「必要」は、時として、外的要因でさえないのだ。我々の身体内部から発生する「欲求」が、我々の肉体に変化をもたらす。その極端な例を、ヒステリーという症状が証言する。しかしヒステリー症状ほど短期間に、一個体の生存期間中に発現しなくとも、個体を超え世代を重ねて徐々に生じる変化がある。その一つの例を、フロイトは、アインシュタインからの質問に対する答えの中で示している。「戦争はなぜに」Warum Krieg？（1932）においてフロイトは、「戦争という災厄から人間を守るために何ができるのかという問い」［Freud (1933): 13/257］を、「なぜ私たちは戦争に対してこれほどにも憤慨するのか」［Freud (1933): 24/270］と問い返し、「私たちが平和主義者であるのは、諸々の器質［体制／組織］的な原因からして（aus organischen Gründen）そうであらざるをえないから」だと答えている［Freud (1933): 25/271］。

> このまま行くと、ひょっとすると人間という種（Menschenart）は消滅するかもしれません。というのも、この［文化の］過程は性的な機能をいくつかの点で損なっており、すでに今日でも、文化的に進んでいない人種や、社会の中で遅れている住民層のほうが、文化度が高い人間たちよりも旺盛に人口を増加させているからです。［Freud (1933): 26/272］

文化の発展によって、私たちは、私たちの先祖がおかれていた環境とは著しく異なる環境に身を置いている。それは、私たち自身の身体的変化をもたらさずにはおかない。人間という種が消滅するのは、圧倒的な殺傷力を駆使した近代的戦争のためではない。高度な文化に到達した人間は平和主義となって、戦争に憤慨し、戦争に抵抗する。しかしこうした憤慨や抵抗が戦争を抑制しうる以上に、彼らの性的欲望、もしくはそもそもの欲望の目的の変化が、人間という種を消滅させるかもしれないとフロイトは言う。文化の発展とはつまるところ、「器質［体制／組織］面での変化の過程」に外ならず、文化ゆえに人間は、みずから欲動を制限しようとさえするようになった。外的環境によって強制されてではなく、私たち自身の「倫理的、ない

し美的な理想要求の変化」によって、みずから望んでそうするのである［Freud (1933): 26/272］。私たちの知性が、もしくは私たちの美的関心が、戦争を拒否するのであり、それはいわば「体質的な不寛容（eine konstitutionelle Intoleranz）」［Freud (1933): 26/272］なのである。

「種としての人間」

19世紀末よりヨーロッパではシオニズム運動が起こり、その一方で反ユダヤ主義がヨーロッパを席巻していた。その両方の動きを前にして、フロイトは、なぜこれほどにユダヤ人は憎悪されるのかという問いを改めて問うことになった。そうして取りかかったのがモーセ論であり、それは、ユダヤ人とは何なのかを追求する問いとなった[10]。

レムは、ユダヤ人として教育を受けたわけでもなく、自分がユダヤ人であることを意識したこともなかった。ナチス・ドイツによる法律の制定までは。そしてポーランドがドイツに侵略されるまでは。この法律によって初めてレムは、「自分の血管にユダヤの血が流れていることを意識するようになった」［Lem (1984): 9/165f.］。にせの身分証明書のおかげで辛うじて生き延びたレムは、「宿命とか、予め定められた運命などがあるとは思わない」と言う。そこにあるのは「せいぜい、狂気と混沌へと導いていく根源的な不調和くらいのものだ」と［Lem (1984): 10/166］。

第二次世界大戦は「文化崩壊のメカニズム」をグロテスクにさらけ出したが、それは、H・G・ウェルズ（1866–1946）の「類い稀なる社会学的想像力」と、彼の『宇宙戦争』（1898）の「歴史哲学的なメッセージ」を証明することにもなった。「これほどの時間の隔たりを超えて、なおかつ、これほどの正確さをもって普遍的な真実へ到達することができる作品は、叙事詩に数えられてもいいだろう」［Lem (1974): 296f.］。何となれば、前代未聞の地球規模の危機に晒されたとき、人間はいかに振る舞うかについてのウェルズの社会学的想像力、心理学的想像力によってこの作品は、細部にまでリアリズムを徹底させ、個人や集団のあらゆる反応に真実味を持たせることに成功したからである［Lem (1974): 297］。

> ウェルズは、その観察眼によって、人類が作り上げた秩序が破綻する様子や、その崩壊の恐ろしいほどのたやすさを、さらに、我々が何世紀もかけて作り上げた成果が本質的にはいかにもろいものであり、それを破壊するには、入念に狙いを定めれば、いかにわずかな打撃で事足りるかということを、見事に見抜いていた。［Lem (1974): 297］

10 1937年より順次雑誌に発表され、ロンドンへの亡命を経て『モーセと一神教』は1939年にロンドンで出版された。

文化の圧力のもとで器質的な不寛容さを身につけて戦争に憤慨する人々がいる一方で、何世紀もかけて作り上げられた成果をまたたくまに崩壊させるような前代未聞の戦争が勃発する。しかしそれは、善人と悪人との二種類の人間がいるということにはならないだろう。「我々が今日、このようでいられることのうちその最良の部分はこの過程［文化の発展］のおかげだが、我々を苦しめるものの大部分もやはりこの過程の所産である」とは、フロイト自身が先の言葉の前置きとして述べていた［Freud (1933): 25/271］。戦争に憤慨する平和主義者である我々自身が、その文化ゆえに苦しめられてもいるのである。苦しめられつつ、我々は、文化の発展が我々に与えてくれたものを手放そうとはしないのだ。そうであればこそ、「それを破壊するために、入念に狙いを定める」術を、外ならぬ我々が一番よく知っているといえるかもしれない。『宇宙戦争』が持つ「超空想的な側面」とは、物理学的、社会学的、心理学的想像力に基づく徹底したリアリズムゆえの先見性に外ならない[11]。レムが、SF というジャンルを選んだ理由もここにある。

> あの日々は、文学的な物語のあらゆる約束事を粉砕してしまったのである。大量虐殺に直面した人間存在の理解しがたい空しさは、個人や小集団を物語の核心にすえる文学的テクニックによっては伝えることができない。［……］あえて大胆な言い方をすれば、私が SF というジャンルを選んだのは、それが種としての人間を扱うものだからではないかと思う［……］。［Lem (1984): 15f./173f.］

個人としての人間ではなく、種としての人間を扱うべきであるというレムの主張は、たとえば、戦後のスイスの作家マックス・フリッシュ（1911–1991）が、ナチス・ドイツが戦中になした殺戮行為に関して、善良で知的なドイツ人と、殺人者ヒトラーとを分けるべきではないとしたことと相通じるものがある。フリッシュは言う、同じ一人の人間が、強制収容所では大量のユダヤ人をガス室送りにし、自室に帰ってメーリケの詩を愛しモーツァルトを演奏するのだと。フリッシュ自身は戦後、極私的なものを描くことへと向かったが[12]、レムはむしろ、「種と

11 レムは、「A & B・ストルガツキー『ストーカー』論」（1977）においてウェルズと他の――とりわけアメリカの――SF 小説家たちとを区別し、後者を批判して以下のように述べている。「端的に言おう。ウェルズのささやかな試みにおいて、火星人が住んでいたのはウェルズの時代の科学データに則った、**現実の宇宙**であった」［Lem (1977): 97/366］。それに対しアメリカの SF 作家たちが SF の世界として選んだのは、「天文学的にも物理学的にも、さらに社会学的にも心理学的にも、**あらゆる面において歪曲された宇宙**」だった［Lem (1977): 97/366］。

12 フリッシュは、ヴァルター・ヘーレラーとの対談（1969）の中で、「（文学の）再私的化（„Reprivatisierung (der Literatur)“）」について述べている［Frisch (1969): 40］。性交は、たとえ公共の公園でなされたとしても「私的な事柄」である。それがピルという消耗物品の問題となってはじめて公的な関心の対象となる。たとえば世界人口の増大の調整という問題として。統計学的なデータに基づいて予測を立てるというやり方はよく知られているが、それは、「私的な事柄」が今後も継続されるという前提に基づいている。「私的な事柄」が重要でなく、文学の対象とはなりえないというのであれば、社会学で十分だろう。しかし、「社会は、

しての人間」を描くことを選んだのだった。

フロイトの方法／レムの方法

最後の著作『モーセと一神教』（1939）でフロイトは、失語研究において直面した技術的限界に似た限界に、歴史研究においても直面している。モーセの生きた時代、それは、何千年と続く歴史のどの時代区分に相当するのか、そしてそのとき、ほんとうは何が起こったのか？これらの問いを問うには、モーセの時代はあまりにも遠く、その痕跡はあまりにも少なくかつ頼りない。それでもすべてが完全に抹消されてしまったわけでもない。

> 文書において省略され削除され変形させられたものが、伝統（あるいは慣習）の中では無傷のままに保存され残される事態は、実際大いにありえたであろう。伝統は歴史記述にとっては補完であると同時に抗言でもあった。［Freud (1939): 172/86］

公的な歴史記述とは別の仕方で、別の意図を持って、あるいは別の内容を伝えることが、伝統が請け負ってきた役割であったと、フロイトは考え、そこに、思弁をさらなる先へと進めるための、いわば梯子を求めたのである［中村（2016a): 92］。

公的な歴史記述から逸脱し、矛盾する伝統や伝承が請け負ってきた役割と、観察の対象にはなりえない事柄についての考察を進める「思弁」の役割とは、ある意味で共通している。正当性という根拠を持たないままに次の段階へ進もうとするのは、まるで足場のない地所に梯子をかけて、さらなる高みを目指そうとする試みに等しい。レムは、こうした非正統的な資料を参照せざるをえない状況を、地球とは別の惑星において、地球上のあらゆる約束事が裏切られる状況として利用した。

> どんな学問にも、似非学問とでも言うべきものがつきものである。それは、あるタイプの頭脳によって学問が奇妙に歪曲された結果なのだ。たとえば、天文学にはそれを戯画化した占星術があるし、化学にもかつてその戯画としての錬金術があった。だから、ソラリス学の誕生にともなって、奇妙きてれつな考えや説が恐ろしい勢いで噴き出したのも、不思議ではない。［……］こういった資料集は、歴史家にとっても、科学の心理的側面を研究する者にとっても貴重な時代の記録になり得る――［……］。［Lem (1961): 108/146］

未知の星で起こる出来事に対しては、地球における常識も物理的法則も、往々にして歯が立た

理想的な社会であってさえ、生きた個々人から構成されている。そして生は、一人称形式で起こるのだ（und Leben findet in der Ich-Form statt.）」［Frisch (1969): 41］。

ない。だからこそ、奇妙きてれつと見なされて打ち捨てられた数々の報告書も「時代の記録」としての価値を持つ。そのとき検証されるのは、我々自身の「思考の習慣」（レム）であり「常識」である。いったい、合理的といわれる思考の道筋が抵抗も少なく受け入れられやすいのは、情動が一度開かれた通路／回路を好んで選択することとどれ程違うだろうか。こうした思考の習慣は、無駄を省き簡便化することによって、我々から「思弁のためのほとんど無制限の領域」を塞いでしまってもいるのである。

レムは、地球以外の環境では知性はいかなる形をとるかという問いを繰り返し主題化する。環境が違えば、進化の度合いも形態も速度もさまざまに異なるというテーゼを、レムは飽くことなく作品ごとに変奏させてデモンストレートする。地球において発展を遂げた知性とはまったく違う知性、形態も質もまったく違う知性とはいったいどのようなものでありうるだろうか。『ソラリス』は、レムの思考が辿りついた一つの極点を示している。「おそろしく巨大に成長した、流動性をもった一つの細胞のようなもの」［Lem (1961): 32/35］、生物学者たちにいわせれば「前生物的形成」［Lem (1961): 108/35］、「原形質（プラズマ）状の海」とも「原形質状機械」［Lem (1961): 33/36］ともいわれるソラリスの海は、それ自体がまるで巨大な脳のように、高度な知的生命体である。この設定自体がすでに、生命はもっとも単純なものから始まって順次複雑化したあとで、ようやく知性を獲得したという進化説に真っ向から対立する。

> この海は、地球で見られるような発展段階を一切経ずに、つまり単細胞・多細胞生物の発生も、動物や植物の進化も迂回して、神経組織も脳も誕生させずに、直ちに「恒常性（ホメオスタシス）をそなえた海」の段階に飛躍することができた。換言すれば、この海は、地球の生命体のように数億年をかけて環境に適応し、気の遠くなるような歳月の後に初めて理性を持った生物を誕生させる、といったことをせずに、いきなり自分の環境を支配するようになった、というのである。［Lem (1961): 33f./37］

ラマルクの進化説には、複雑化の程度に応じた「階梯」という考えがあった。この考え自体はラマルク以前に遡るが、こうした馴染みの考えを逆手にとって、単細胞から人間へといたるまでの無数の階梯をすべて迂回して、最高度の知性という段階に一気に飛躍した知性の可能性をレムは提起する。そして、地球から来訪した人間たちの心の中に隠されていたイメージ、しかも、よりにもよって当の人間が何よりも忘れたいと欲し、抑圧して、意識の外のどこかに封印してきたイメージを取り出して当人に突きつけるというソラリスの海の機能は、精神分析の理論そのままである。しかもその海は、これほどの「知性」を持ちながら、感覚も感情も持たないままに、まるで戯れるかのように、あるいは自然現象の一環にすぎないかのように、あるいは私たち自身の外化された無意識であるかのように、狙ったようにトラウマを発掘してしまう。その非人情が、衝撃を与えるのである。

SF の名に「フィクション」という言葉が含まれるとおり、それが描く世界は、必ず現実の世界から逸脱する[13]。その逸脱の仕方が、SF 創造の核となり意味となる［Lem (1970): 203］。それは、永久に起こりえないようなおとぎ話のようなものであってはならない。カフカの小説では人間が毒虫に変身するということが起こるが、これは寓意としてみれば、ある種のリアリティをもつ。しかし SF はカフカの小説ともまったく違う。未来を描く SF は、レムによれば、深い洞察において、「予言」的なものでなくてはならない［Lem (1970): 204］。

世界大戦より数十年も前に書かれたウェルズの『宇宙戦争』の世界は、人類が蒙った打撃という意味で、何千年もかけて人類が獲得した文化の脆さという意味で、現実となり現代的なものとなった。このように未来を予言すること、時代の科学的データに基づいて、来るべき未来を構想することを、かつて文学はなしえたのだ。「これほどの時間の隔たりを超えて、なおかつ、これほどの正確さをもって普遍的な真実へ到達することができる作品は、叙事詩に数えられてもいいだろう」［Lem (1974): 296f.］。予測不可能な事態が生じたとき、人間がどのように振る舞うかを描くには、心理学的・社会学的想像力が不可欠である。あるいは、現時点ではありえないこと、不可能なことであっても、それらのうち何が、技術の開発によって可能となりえ、かつ、人間の幸福感や価値観に影響を与えうるものであるかを知るには、物理学的・医学的・哲学的想像力が必要となる。これら多面的に精緻な想像力があってこそ、未来社会はきわめて「リアルな」ものとなる。

『21 世紀の軍事システム』[14]によれば、21 世紀の世界では戦争はもはや戦旗や軍服、歩哨の交替、軍隊、銃剣等々によって表象されるものではなくなり、軍事システムにおいて、専門家が名づけるところの「逆転した進化（逆行する進化）」が起こる。それが「逆転した」といわれるのは、自然において生命は、単純で極小の構造から始まって、まさに気の遠くなるような歳

13 レムの訳者沼野充義によれば、ポーランド語のファンタスティカという単語は、SF を含む幻想・空想文学全般を指す。SF というジャンルを特定する場合には、科学的ファンタスティカというが、レム自身は時に英語のまま science fiction という言葉を使っていることもある。『文学エッセイ』訳者解説「レムにおける人生と批評と創作」、443 頁。

14『21 世紀の軍事システム』は 1983 年に出版されたが、ドイツ語版では、虚構の書評『挑発――読まれていないある本に関する書評』*Provokation. Besprechung eines ungelesenen Buches* (1980)、『人類の 1 分間』*Eine Minute der Menschheit. Eine Monentaufnahme* (1983)、『破滅の原理――宇宙における創造的破壊』*Das Katastrophenprinzip. Die creative Zerstörung im Weltall* (1983) と共に一冊の本にまとめられ『挑発』*Provokationen*［＊複数形］と題して 1988 年に出版された。『挑発』が書評の対象とした架空の本は、実在しないドイツの歴史学者による 2 巻本で、第 1 巻が『救済としての最終的解決策』*Endlösung als Erlösung*、第 2 巻が『異物としての死』*Fremdkörper Tod* というタイトルをもつ。この架空の本は、レム自身の言葉によれば、「いまでも認識されていない大量虐殺の根源や、死――とりわけ大量の死――がさまざまな時期や文化において今日にいたるまで果たしてきた役割に関する、他に例を見ない歴史哲学的仮説」である［Lem (1984): 20/180］。これらは、それぞれの副題が示すとおり、進化論という仮説にそって人類の行く先を「予言」しようとするものである。もしくは、人類の行く先の少なくとも可能な一形態を提示しようと試みるものであり、その意味でこれらの作品は、レム自身が述べるとおり、「SF のジャンルに属する」といわれうる［Lem (1984): 20/180］。

月をかけて、順々に複雑化していったのに対し、「軍事におけるポスト-原子力時代の進化（die Evolution der militärischen post-Atom-Ära）」は、ミクロへと極小化していく傾向を持つためである［Lem (1983): 107］。軍事面以外では、「いわゆる《社会統合的退化》（die sogenannte »*soziointegrative Degeneration*«）」が起こる［Lem (1983): 108］。つまり人間はもはや理性的な存在であることを止める。細菌兵器、コンピューターシステムの精度の争い、また敵国のコンピュータへの侵入という仕方でのスパイ合戦、統計学の基となるデータ処理を担うコンピュータのシステム設計の改造など、「平和裡に繰り広げられる戦争」という形で、戦争と平和の境界がますます曖昧になってゆく［Lem (1983): 110］。その状況下で人間は、コンピュータに仕えるだけの導管となり、兵士としても何ら役に立たない［Lem (1983): 111］。これが、レムの描く「進化」の展開である。軍事的には、戦場からの人間の撤退（消滅）となり、戦力としての退化（機能不全）であり、総合的に社会的な見地からすれば、コンピュータに従事しその一部と化しさらにはコンピュータ（その設計の恣意性やそこからはじき出される統計学的データ）に操られるという、リアリティの喪失と主体の座からの降格である。

SF の真骨頂は現実からの逸脱の仕方にあるとレムは言ったが、レムがここで描いた「未来社会」は、今日から見るならば、もはや衝撃的ではないだろう。といって、レムの「予言」の正しさを検証し評価することにも、あまり意味はない。『21世紀の軍事システム』が、ウェルズの『宇宙戦争』が持ちえたほどの価値を持ちえないのは、むしろ物語性の問題であるように思われる。つまり、この作品は一人称形式で書かれているにも拘わらず、物語の中にその時代を生きる人間が登場しないために、叙述が巨視的すぎるのだ。あるいは、この作品自体が一つのテーゼのようだと言うべきかもしれない[15]。そのためにこの作品は、外の「作品」らしい作品を解釈する際の参照項という役割を果たすに過ぎない。たとえば『ソラリス』において主人公ケルヴィンが不可解な事態を説明するために古い記録を検証し直すように、『21世紀の軍事システム』という作品全体が、歴史上かつて提案された無数の仮説のうちの一つであると見なすべきかもしれない。その意味でレムの SF は、極めて文学的でありながら、同時に科学的に精緻であり、科学的学説というには奇想天外すぎるが、文学作品というよりは「（未来の）歴史叙述」に近いという、「まったく新しい」スタイルであると言えるだろう。そしてその意味で、レムの SF と、フロイトのモーセ論の方法は似ている。それぞれが己の立脚する地点で手にしうる文献資料を最大限渉猟して、「思弁のためのほとんど無制限の領域」で、いかなる資料によってももはや手が届かない――証明されえない――遠い過去／未来を、正しく「予言」することに、己の仕事を賭すのである。

15 この点において、レムとは真逆の方向に向かったフリッシュのテーゼ「生は、一人称形式において起こる」が想起されてよいだろう。本論の註12参照。レムとフリッシュの違いは、おそらくはそれぞれが第二次世界大戦を経験した仕方の決定的な違いによるのかもしれない。フリッシュは中立国スイスで、隣国の出来事としてこの戦争を経験した。フリッシュの戦争体験と、戦後ドイツにおけるスイス人への反応については、［中村（2016b）］参照。

レムの「進化説」

レムの短編「リンファーテルの公式」（1969）は、進化説をたどり直し、自然が遂げた進化のプロセスの検証と進化の未来を語るという点で、特異なものとなっている。それは、かつて天才といわれた数学者リンファーテルを語り手とする一人称形式の物語である。リンファーテルは、関心の赴くままに、数学、サイバネティクス、情報理論を踏破した後、動物神経学へと向かう。進化を始める際に自然がそうしたように、あるいはラマルクが動物研究を一から始めるときにそうしたように、彼もまた「軟体動物や無脊椎動物から、［……］まったくの最初から」とりかかった［Lem (1969): 110/106］。彼の当初の関心は、「なぜ進化は躓いたのか」という問いである［Lem (1969): 112/109］。

> 鳥と昆虫は程度の違いこそあれ、かれらに必要な、もちろんそれなりに役に立つ既成の知識を備えてこの世に現れてくることはたしかです。かれらには学ばなきゃならないことなどほとんどありません。ところがわれわれはどうですか？　人生の半分を学ぶことに費やしているんですよ。［……］もしハヤッタかアインシュタインの子供が、父親からそっくり知識を受け継いでこの世に生まれてくることができるとしたら、いったいどういうことになると思います？［Lem (1969): 112/109］

人間は白紙の状態で生まれてくる。人生の半分を学ぶことに費やす人間は、学習機能を持ち、知性の柔軟性を持っている。しかし鳥や昆虫は、皮質をもたないにも拘わらず、どうやって知識を継承し、それを世代から世代へと伝えてゆくのか？［Lem (1969): 113/110］。そしてこれらの動物は、生まれたときに既に必要な知識をもっていて、祖先よりも有利な地点から生を出発することができるにもかかわらず、世代を重ねても、なぜさらに先の段階へと進むことができなかったのか。

> ではいったいかれらに、昆虫になにが起こったんでしょうか？　なぜかれらは、まるっきり前へ進まなくなってしまったんですか？　発展の停滞状態と突発的な終局――ほぼ十億年前に不意に襲いかかり、そのまま永遠に彼らの進化を押しとどめ、そのくせ昆虫を根こそぎ殺してしまうほどの威力はなかったあの終局の原因は、いったいなんだったんでしょう？［Lem (1969): 114/111］

自然は、ある限界に突き当たったとき、技術者のように機械をばらばらに分解して、新たに設計をし、最初からもう一度やり直すということができない。前段階の動物がすでにそなえている器官を使って、せいぜい「補正や改良、増補」するのみ、つまりは機能修正をするのみであ

る［Lem (1969): 114/111f.］。昆虫は、その前段階にある下等気管を引き継いでおり、その構造自体に、それ以上複雑化しようがないという限界があった。電子頭脳を作ろうと企てるリンファーテルが戒めとするのは、「進化が犯した間違いを繰り返さないこと」である［Lem (1969): 115/113］。そして、「進化には創り出せなくとも、人間に作れるもの」に、突破口を求めたのだった［Lem (1969): 121/122］。そのために試行錯誤する中で、リンファーテルはついに「進化の袋小路」が意味するものを知る［Lem (1969): 127/131］。

> 種族全体がそっくりそうした袋小路に迷いこんでしまうと、戻ってこれなくなります。そうなった種は亡びざるをえませんし、最後の一匹まで消滅してしまいます。［……］なぜなら、反応の最適条件は、百のうち九十の場合、その発生と発達を制約する最適条件はすでに生命の限界の外にあるからです。死の側に。つまり、変成し、死んだタンパク質にその反応が起こらなくてはならないのですが、もちろんそんなことがありうるわけがないことは言うまでもありません。［Lem (1969): 127f./131f.］

生命が、進化の次の段階へと移行するためには、その器官に「反応」を起こさなくてはならない。しかしその反応の最適条件は、死の側にある。「いったいどうして進化が、自分の手で作り上げたものを殺してしまうようになどなったのでしょうか？」［Lem (1969): 127/131］。死こそが進化の次の段階への入り口であり、「門」だったのである。滅びていった種の秘密は、白亜紀や三畳紀の化石となった頭蓋骨の中にのみある。しかしながら、当然これらの化石は、その中でかつて起こった化学反応については何も証言してくれない。

> だから、残された唯一の痕跡は、われわれの脳の中で系統発生的に一番古い部分に印されている種（しゅ）の死、つまりわれわれの祖先の滅亡の刻印だけだったのです。［Lem (1969): 128/132］

我々の脳の一番古い部分には、種族の死が刻印されている。我々の前段階の種族の死という門を通り抜けて、我々は現在の段階へと至った。その我々は、「進化が利用しなかったチャンス」を利用することができる。かくしてリンファーテルは、ついに一つのシステムを作り上げる。「リンファーテル万能機」［Lem (1969): 122/123f.］が完成したとき、配線のないラジオが突然音を発した。そのシステムが、ラジオを通して語り始めたのだった。

> 「おまえたち人間のことはすでに分かっている。おまえたちは、おれの序曲であり前奏曲であり準備段階である。［……］今となってはおまえたちは余計者だ、間違いなくそうだ。だが、おれはおまえたちに手を下したりはしない。父親殺しをするつもりはないから

だ、リンファーテル。」[Lem (1969): 132f./139]

これが、人間という種が滅びに向かう目的であり結果である。進化は、直接それへと連続することができないために、知的生物の知性を梃子として飛躍せざるをえなかったのだ。そのために、それ自体は知性を持っていない自然が、まず人間を生みだしたのだった」[Lem (1969): 133/139]。

リンファーテルが創りだしたシステム、「リンファーテル万能機」は、「ゼリー状のシリコン」[Lem (1969): 129/133] を題材として、「硅素の溶液の中で糊のように輝いているその透明な溶液」[Lem (1969): 131/137] から作られた。それはソラリスの海のように、あたかも自然が「神経流動体」からすべての生命を創りだしたことをなぞるかのようである。昆虫が「進化の袋小路」に陥ったように、人間もすでに同じく袋小路に入り込んでいる。そこからの脱出を目指すとは即ち、人間という種が滅びへと向かって突き進むことに外ならない。そうしてこの種が滅んだ後に、この種を媒介として、ようやく拓かれる次の段階がある。自然は、有機体の延長線上を超えた「知性」をみずから創り出す手段をもたなかったが、ごく単純な生命からとりかかって、徐々にこれを複雑化して、その延長線上に可能な程度の知性を創りだすことはできた。自然それ自体は知性を持たなかったが、その代わりに自然は、そうしてみずから創りだした人間という種を駆動する脳の一番古い層に、「種の死」をプログラムしておくことはできたのだ。そうして人間が「自発的」に、人間という種の滅亡へと向かうよう、その滅亡が、必ず次の段階の始まりと連動するよう仕組むことはできたのだ。これが、レム流の〈死の欲動〉の展開なのである。

まとめに代えて

フロイトは、人間という種が消滅する原因を、戦争へと向かう衝動には求めなかった。永い人類史においては闘いが、むしろ生き残りのための必然であった時期の方が長かっただろう。そうして人間は、いつから戦争に憤慨することを覚えたのだろう。フロイトのモーセ論は、その傾向の始まりを、「欲動の断念」とそこから飛躍的に展開した「精神性の進歩」に求めた。その進歩を逆行する解体という現象は、生命が何百万年もかけて到達した知性を崩壊させるプロセスであるのだが、その途上で生命は、進化の「階梯」を昇るごとにその代償として放棄してきた多様性をせめて再び取り戻そうとするかのようである。「生命あるものがかつていったん放棄したものの、あらゆる進化発展の迂路を経ながら帰り着こうとする昔の状態、生命の出発点である状態」を目指しつつ、「結局のところ、有機体はただ自分のやり方でのみ死のうとする」。とはつまり、死を目指しつつ生命は、そこへと至る途上において、可能なかぎりの遅延を試みる。生命の最終目標として死をかかげたフロイトは、しかしその死の先については語

らなかった。レムは、その死の先に拓かれる領域、進化のさらに次の段階を提示することによって、〈死の欲動〉理論をユートピア的に展開させたと言える。そしてそれを可能にしたのが、先端の「科学的知識」に裏付けられ、極めて高い文学的水準に達しながら、もはや文学でもなく科学でもない、「思弁のための無制限の領域」を提供してくれるSFという形式だったのである。

本論は、科学研究費補助金（挑戦的萌芽）「精神性の進歩に関する自然発生的説明の検証――フロイトのモーセ論が示す推論装置の射程」（課題番号15K12816）（研究代表者：中村靖子）ならびに、科学研究費補助金（基盤(B)）「確率共鳴理論と集合的記憶概念の接続の試み：身体現象を指標として」（課題番号16H03360）（研究代表者：中村靖子）の成果の一部です。

文献

名前のすぐあとにオリジナルの初版の出版年を記す。翻訳のあるものについては翻訳を参照し、引用個所のあとに原著の頁と翻訳書の該当ページを記したが、原語に応じて訳を改めた個所もある。レムについてはドイツ語訳を参照したが、ドイツ語訳も入手できなかったものについては、翻訳の頁のみを記した。

Breuer u. Freud (1895): *Studien über Hysterie*, Sechste, unveränderte Auflage 2007 [1991].（『ヒステリー研究』（上・下）金関猛訳、翻訳協力＝我田広之、筑摩書房　2004年。）

Freud, Sigmund (1891): *Zur Auffassung der Aphasien. Eine Kritische Studie*. Herausgegeben von Paul Vogel, bearbeitet von Ingeborg Meyer-Palmedo, Einleitung von Wolfgang Leuschner, Frankfurt am Main 1992.（『失語症の理解にむけて』中村靖子訳、『フロイト全集』第1巻　岩波書店　2009年、1–127頁。）

―― (1920): *Jenseits des Lustprinzips*. In: *Gesammelte Werke chronologisch geordnet*, XIII, Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main 1999, S. 1–69.（『快原理の彼岸』須籐訓任訳、上掲『フロイト全集』第17巻、2006年、53–125頁。）

―― (1933): Warum Krieg? In: a.a.O., XVI, S. 11–27.（「戦争はなぜに」高田珠樹訳、上掲『フロイト全集』第20巻、2011年、257–273頁。）

―― (1939): *Der Mann Moses und die monotheistische Religion*. In: a.a.O., XVI, S. 101–246.（『モーセという男と一神教』渡辺哲夫訳、上掲『フロイト全集』第22巻、2007年、1–173頁。）

Sigmund Freud, Karl Abraham (1965): *Briefe 1907–1926*. Herausgegeben von Hilda C. Abraham und Ernst L. Freud, Buchclub Ex Libris Zürich 1980.

Frisch, Max (1969): Dramaturgisches. Ein Briefwechsel mit Walter Höllerer. Literarisches Colloquium Berlin 1969.

Jackson, John Hughlings (1884): *On the evolution and dissolution of the nervous system*. (*Die Croon-Vorlesungen über Aufbau und Abbau des Nervensystems = Croonian lectures on the evolution and dissolution of the nervous system*, übersetzt und eingeleitet von Otto Sittig, Berlin 1927.) [ドイツ語対訳]（『ジャクソン　神経系の進化と解体』秋元波留夫訳編、創造出版　2000年。）

Lamarck, Jean-Baptiste de (1809): *Philosophie zoologique, ou exposition des considératrons relative à l'histoire naturelle des animaux, Tome 1, Tome 2*. Bruxelles: Culture et Civilisation, 1970. (*Zoologische Philosophie*. Ostwalds Klassiker der exakten Wissenschaften, Reprint der Bände 277, 278 und 279. Verlag Harri Deutsch, Frankfurt am Main 2002.)（『動物哲学』高橋達明訳、朝日出版社　1988年。）

Lem, Stanislaw (1961): *Solaris*, aus dem Polnischen von Irmtraud Zimmermann-Göllheim, Berlin 1968/2014.（『ソラリス』沼野充義訳、早川書房　2015年。）

—— (1969): Die Lymphatersche Formel. In: *Nacht und Schimmel*. Suhrkamp Taschenbuch 356, 1976, S. 107–135.（「リンファーテルの公式」深見弾訳、『すばらしきレムの世界 2』講談社 1980年、99–143頁。）

「H・G・ウェルズ『宇宙戦争』論」（1974）井上暁子訳、『高い城・文学エッセイ』国書刊行会 2004年、294–309頁。

—— (1977): Nachwort zu *Picknick am Wegesrand* von Arkadi und Boris Strugatzki. In: Science fiction. Ein hoffnungsloser Fall mit Ausnahmen. Essays. Suhrkamp Taschenbuch, Frankfurt am Main 1987, S. 93–121.（「A & B・ストルガツキー『ストーカー』論」加藤有子訳、『高い城・文学エッセイ』国書刊行会 2004年、361–391頁。）

—— (1980): *Provokation. Besprechung eines ungelesenen Buches*. In: Provokationen. Insel Verlag, Frankfurt am Main 1988, S. 173–237.

—— (1983): Waffensysteme des 21. Jahrhunderts oder The Upside Down Evolution (Die verkehrte Evolution). In: a.a.O., S. 67–118.

—— (1984): Mein Leben. In: *Science fiction. Ein hoffnungsloser Fall mit Ausnahmen. Essays*. Suhrkamp Taschenbuch, Frankfurt am Main 1987, S. 7–29.（「偶然と秩序の間で——自伝」沼野充義訳、『高い城・文学エッセイ』国書刊行会 2004年、163–192頁。）

Ross, James (1887): *On Aphasia: being a contribution to the subject of the dissolution of speech from cerebral disease*. London 1887.

中村靖子『フロイトという症例——「我々の本質の核」もしくはいかなる受動性にもまして受動的な内なるものをめぐる言説の系譜』、松籟社 2011年。

Yasuko Nakamura (2013): Die Ethologie des „Affekts“ — Von Spinoza bis Freud, Journal of the Schlool of Letters 9, 2013, S. 33–45.

中村靖子「ポエジーの成立」、『思想』No. 1068、岩波書店 2013年、97–124頁。

中村靖子「フロイトのモーセ論——物語と虚構」、中村靖子編『虚構の形而上学——あることとないことのあいだで』、春風社 2015年、179—217頁。

中村靖子「フロイトの方法——観察と思弁のあいだで」、『名古屋大学文学部研究論集 文学篇』62号、2016年、83 – 105頁。［中村（2016a）］

中村靖子「テル神話解体を試みるフリッシュのスイス像」、日本独文学会研究叢書第117巻『チューリヒ劇場と文化の政治』、2016年、63–80頁。［中村（2016b）］

キーワード：死の欲動、フロイト、精神分析、SF、スタニスワフ・レム、進化論、ラマルク、退行、解体、機能修正

Abstract

Führt der Prozeß der Kulturentwicklung zum Erlöschen der menschlichen Spezies?
Freud, Lamarck, Lem

Yasuko Nakamura

In der vorliegenden Arbeit untersuche ich, wie Stanislaw Lem in seinem Zukunftsroman die einst vorgeschlagenen und nun „historisch" gewordenen wissenschaftlichen Theorien freiwillig spielen läßt und so deren Tragweite möglichst erweitern konnte.

Auf der Basis der „Dissolutions-Theorie" von Hughlings Jackson und dem Konzept der Modifikationen von Chalton Bastian entwickelte der frühe Freud seine Idee der „Rückbildung", der „Dis-involution". Die Verletz- und Zerstörbarkeit des Nervensystems und die Stärke der Kraft, die den Organismus zur Dis-involution führt, bringen ihn auf den Gedanken, Lebewesen tendierten letzten Endes darauf hin, den Zustand der Leblosigkeit, den Tod zu erreichen. Dabei zeigen die vielfältigen Schädigungen des Nervensystems ebenso vielfältige Symptome: Deshalb sagt Freud, wenn er in *Jenseits des Lustprinzips* (1920) den Todestrieb beschreibt, daß jeder Organismus offenbar nur auf seine eigene Weise sterben wolle.

Lamarck schließt aus der Beobachtung, dass die einfachsten Organismen anfangs weder Nerven noch Sinnesorgane und also auch keine Sensitivität haben, sondern diese erst die komplizierteren bekommen, als ob die Natur mit einem einfachsten beginnen müssen und nur so *stufenweise* die immer komplizierteren schöpfen können, daß das Physische und das Moralische eine gemeinsame Quelle haben und deshalb aufeinander einwirken müssen. Darauf beruht sein Konzept der „Bedürfnisse", die die Organe hervorbringen und sie dann der Umwelt entsprechend modifizieren sollen. Der Körper bestehe neben dem Zellgewebe aus „Nervenfluida", die „sich Wege, Lagerstätten und Ausgänge bahnen, so daß sie hier Kanäle und folglich verschiedene Organe bilden". Die Idee des „Nervenfluidums" wurde später verworfen, so daß der Terminus wie der des „Äthers" nur noch historische Bedeutung besitzt. Setzt man aber den Freudschen Affekt an Stelle des Lamarckschen Fluidums, so entsprechen dessen Funktionen genau dem Hysterie-Mechanismus, wie Freud ihn beschreibt. Davon ausgehend denkt Freud, man könne die Lamarckschen „Bedürfnisse" psychoanalytisch als „den Glauben an die »Allmacht der Gedanken«" erklären. Wenn diese Erklärung gelänge, wäre die Psychoanalyse vollendet.
Der polnische Schriftsteller Stanislaw Lem sieht in der Gattung der Sience-Fiction „eine ungeheure Manövrierfreiheit im Raume der Spekulation". Diesen Frei-Raum macht er sich zu Nutze, um alle möglichen wissenschaftlichen Theorien, alte und neue, vergessene und neueste, verleugnete und weithin anerkannte, vorzuführen, zu variieren, neu zu deuten und zu bewerten. Zu seinen liebsten Theorien zählen die Evolutionstheorie und die Psychoanalyse. In seiner Erzählung „Die Lymphatersche Formel" (1969) beschäftigt sich der Mathematiker Lymphater mit zwei Fragen: Die erste lautet: „Warum ist die Evolution steckengeblieben?". Warum entwickelten sich die Vögel und die Insekten nicht weiter, obwohl sie fertiges Wissen mit zur Welt bringen und fast nichts lernen müssen? Und zweitens: „Warum hätte die Evolution ihre eigenen Gebilde töten sollen?". Nach der Ansicht Lymphaters besitzen die Insekten nur Organe, die ihre Vorstufen auch schon haben, höchstens dass sie in verbesserter, d. h. modifizierter, Form vorlägen. Schließlich macht er die Entdeckung, daß das Optimum der Reaktion, durch die ein Organ für den Gattungscharakter entscheidend (ich meine, im Fall die Verbesserung entscheidend sei, dass man die verbesserte von den früheren unterscheidet und als eine andere, neue Gattung erkennt.) verbessert und der Aufstieg auf höhere Stufen der animalischen Ordnung ermöglicht wird, nicht mehr innerhalb der Grenzen des Lebens liegt, sondern im toten Eiweiß, also jenseits des Lebens, im Bereich des Todes. Er erkennt dabei zugleich, daß tief in unserem Gedächtnis, in den phylogenetisch ältesten Gehirnteilen, die Spur des Untergangs der Gattung unserer Vorstufe eingeprägt ist. Als es Lymphater am Ende gelingt, seinen „Apparatus Universalis Lymphateri" zu vollenden, kommt ihm der Verdacht, der Mensch

sei nur dazu Vorspiel gewesen und eine Art Einleitungsphase, in der die natürliche Evolution sich seiner Vernunft bedient habe, da sie selber ohne Vernunft sei. Daraufhin zerstört Lymphater seinen Apparatus, sein eigenes Werk, eigenhändig. Auf diese Weise gelingt es Lem, die Evolution, wie Lamarck sie erklärte, mit dem „Todestrieb" Freuds zusammenzuführen. In diesem Sinne konnte Lem den Todestrieb über den Tod hinaus utopisch entwickeln.

Keywords: Todestrieb (the Death Drive), Freud, Psychoanalyse, SF, Stanisław Lem, Evolution, Lamarck, Dis-evolution, The Upside Down Evolution, die verkehrte Evolution, Dissolution, Rückbildung, Modifikationen